

会 議 名	第3回 まちづくりの勉強会
日 時	平成30年10月31日 午後7時30分～午後9時25分
内 容	<p>[テーマ] 高山の未来のための^{まち}都市づくり ～30年後(2050年)の高山、何を目指して生きるんや～</p> <p>[参加者] 市 民 16名 (10代：0名 20代：1名 30代：3名 40代：5名 50代：4名 60代：3名) 事務局 4名 計20名</p> <p>[勉強会の流れ] ① はじめに (10分) 進行：事務局 ② 【前半】 コメンテーターによる発言 (35分) 発言内容：30年後の高山はどんな風になっているかをイメージしてみると？ 発言者：3名 (伝統工芸士、団体職員、木工職人) 進行、記録：事務局 ③ 休憩 (15分) ・休憩時に、コメンテーターの発言に対する質問、議論したい事項をアンケート調査 ④ 【後半】 全体ディスカッション (55分) ・アンケート意見に基づいた意見交換</p> <p>[コメンテーターの主な発言] ① 伝統工芸士 ・30年後原点回帰するのではないか。 ・災害が起こるたびに機械が役に立たないことに気付く。 ・春慶は400年の歴史があり、昔も今も同様の手作業。 ・ものづくりの力が生き延びる術となると思う。 ・他の土地では既に技がなくなってしまうことに高山の人は知らないのでは。</p> <p>② 団体職員 ・情報伝達の発展とともに、今後は人同士のコミュニケーションに障がいは無くなるのでは。 ・〇のイメージも今は人それぞれ脳の中で感じる大きさが違うが、AIにより意識共有が可能になると思う。 ・機械ではできないものとして、50年、100年経っても、人が人に求める温もりは変わらない。より家族、人との時間が重要になると思う。 ・高山はサービス業に就いている人が多いが、親との時間を過ごすには、学校を土日休みではなく平日休みにするような考えがあっても良いのではないか。</p> <p>③ 木工職人 ・高山の木工のレベルは高いが、地元の人こそ知らない。 ・木工の職に就いている人は他所の人がほとんどである。 ・30年後、ものづくりが生き残れるだろうか？残っていてほしい。危機感を持っている。 ・小学校から中学、高校まで一緒に過ごしているため、人のつながりが強く濃い。 ・マイナス面もあるかもしれないが、将来的には良い方向に行き、強い武器になるのではないか。</p> <p>[全体ディスカッションでの主な意見] (問)は【前半】からコメンテーターへの質問、・はそれに対するコメンテーター他参加者の意見 (問)30年後原点に戻る。そう感じさせる春慶創作時、何を考えているか。 ・受け継がれる漆器、未来に使う人を想う。 ・山を考えながら木工のものづくりをする時もある。</p>

(問) 移り住む場所に高山を選んだ理由。

- ・春慶の綺麗さ、美しさ。職人。四季が感じられること。

(問) 人のつながりが強い、濃いことの怖さは。

- ・最近が良い面の方が大きいと思っている。
- ・移り住んだ人だからこそできることもあるのではないかな。

(問) 学校や役所機能を土日も開くという斬新なアイデアだが具現化できないか。

- ・ボストンのサドベリースクールの例がある。自分たちで作っていけないか。
- ・土日が休みであるべき業種とそうでない業種を分析し、試してみると良い。
- ・働き方が多様化している。ICTを含めていろんな可能性を探っていけばよい。
- ・地域で子どもを育てる、コミュニティスクールの役割を持たせる。

(問) 飛驒の家具、どのようにすれば地元に浸透していくか。

- ・良いものが外でどう評価されているかを知ることが大切。評価の逆輸入。
 - ・子どもに、しっかり丁寧に説明することが大事。
 - ・子どもは理屈はわからなくても、美しいという感性とか直感で感じ、記憶に残る。
 - ・みたらしだんごのように市民も観光客も買うようなものこそ残っていくのでは。
-
- ・高山の職人たちの技術を結集させて、高山城を作ってみたらどうか。後継者育成にもなる。
→アイデンティティの創出

[アンケートより抜粋]

- ・情報分析をして、その結果を広く市民に示す方法を考えるのも勉強になるのでは。
- ・高山は地域の力はあるが、地元に対する情報発信がうまくできていないことが課題。 等

[まとめ・次回について]

- ・原点に戻ることの大切さ。
 - ・高山ならではの市民が知る、気付くことの大切さ。
 - ・高山城を作るくらいの夢を持って。
-
- ・第4回は、平成30年11月28日(水) 19:30~21:30 市役所にて。
 - ・これまでの議論をふまえ、テーマを絞り、グループワーキング形式とする。